

# 航空自衛隊松島基地見学

平成29年12月6日、航空自衛隊松島基地を見学する機会を得たので、その概要を報告する。

## 1. 航空自衛隊松島基地

### (1) 基地の概要

宮城県東松島市矢本に所在する航空自衛隊の基地で、約1,000名の隊員が勤務している。

所属部隊としては、航空教育集団隷下で戦闘機操縦教育を行う第4航空団、航空総隊隷下で航空機搭乗員の救助や遭難者の救出および急病人等の輸送などを行う松島救難隊、航空支援集団隷下の松島管制隊および松島気象隊などがあり、航空祭等で人気のブルーインパルス（第11飛行隊）も第4航空団に所属している。

基地の総面積は約366万㎡（東京ディズニーランド7個分）あり、ほぼ直角に交差する2本の滑走路（主滑走路：約2,700m、副滑走路：約1,500m）が特徴である。



松島基地全景（Google mapより）

### (2) 基地の歴史

松島基地の歴史は、昭和12年7月7日の日中戦争開戦を機に大日本帝国海軍の海軍航空隊の基地として設置が決定され、昭和17年10月21日に館山海軍航空隊松島派遣隊が開隊、昭和19年に松島海軍航空隊が開隊されたのが起源となる。

昭和20年8月15日の終戦を経て同年9月15日に松島海軍航空隊が解隊され、米軍が駐留を開始した。昭和29年には保安隊臨時松島派遣隊/航空自衛隊臨時松島派遣隊が新設、昭和30年に米軍から日本政府へ返還されて松島基地が発足した。

その後、昭和33年にF-86F戦闘機を保有する第4航空団が新設され、対領空侵犯任務（スクランブル）を行っていた時期もある。

昭和48年に飛行教育集団に編合され、以後、主に戦闘機パイロット養成のための教育部隊



訓練前の駐機場風景

としての任務を付与されて現在に至る。

教育用航空機の機種は、F-86F（昭和33年～50年）、T-2（昭和50年～平成16年）、F-2（平成16年～現在）であり、その間の昭和57年～平成7年にT-2ブルーインパルス、平成7年からT-4ブルーインパルスが母基地として使用している。

## 2. 東日本大震災による被害および復旧・復興

### (1) 被災状況

平成23年3月11日14時46分頃に発生した東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）により、東松島市では震度6強を観測した。

地震から15分後に津波が到達するとの気象庁発表があったことから、当時の基地司令の即断によって基地で勤務していた隊員約900名は全員が建物屋上に無事避難することができたが、残念ながら地震発生により休暇を取りやめ出勤途中であった隊員1名が亡くなられた。

津波の到達は、実際には気象庁発表よりも遅い約1時間10分後であった。

冠水のため電源設備等が損傷したため基地機能は完全に喪失、また当日の悪天候のため飛行をキャンセルしてエプロンに駐機してあった航空機や、格納庫内の航空機が押し流

されてしまった。

被害機数は、F-2B戦闘機×18機（内5機が用途廃止）、T-4練習機×4機（内3機が用途廃止）、U-125A救難捜索機×2機（用途廃止）、UH-60J救難ヘリコプター×4機（用途廃止）であった。

当時はこれらの被害に対し、基地司令の判断への批判が多数あったが、決して間違った判断ではなかったとのこと。

なお、F-2Bについては各会員企業の尽力により、平成29年度中に13機の復旧が完了する見込みである。またブルーインパルスについては、震災翌日に予定されていた九州新幹線全線開業の祝賀飛行のため前日から福岡県芦屋基地に展開していたため、被害を免れることができた。

### (2) 復旧

12日の夜明けより滑走路の復旧に着手、ほとんどの車両も流されてしまったため隊員の手作業による復旧であった。

地域住民への炊き出しは3月20日から開始され5月8日まで継続した。また入浴支援についても3月24日から7月31日の間で実施された。陸上自衛隊の天幕型浴場とは異なり、基地内隊舎の浴場を開放したことから特に



押し寄せる津波（航空自衛隊撮影）



流されるF-2B、T-4（航空自衛隊撮影）

女性の被災者に喜ばれたとのことであった。

平成25年3月31日には、一時的に芦屋基地を拠点としていた第11飛行隊（ブルーインパルス）が松島基地に帰還、また平成24年4月から青森県三沢基地へ移動し他部隊のF-2Bを借り受ける形で教育訓練を行っていた第21飛行隊も、平成28年3月20日に帰還した。

### (3) 復興

平成28年8月28日、松島基地復興感謝イベントとして、震災後初めて地元でブルーインパルスによる展示飛行を実施、更に翌年の8月27日には7年ぶりに航空祭が復活、基地が一般公開された。

震災による津波被害の教訓から、松島基地は駐機場を4.5mかさ上げする津波対策工事と、新格納庫の建設を実施、更にブルーインパルス専用格納庫についても曳家工法によって4.5mのかさ上げを行い、平成28年3月に工事が完了した。

また、屋外の配電設備やエアコンの室外機についても漏電対策のため高所化し、庁舎内には防水扉を設置、更に1階部分のコンセントは全て高さ120cmの位置に移設された。

基地保有車両が津波に流されたことにより

その後の復旧作業に支障を与えたことから、松島基地では高台駐車場への車両移動訓練も導入し、定期的に除雪車やトラック等の車両を短時間で避難させる訓練を行っている。また長期休暇前には予め高台駐車場に集結させておく対策も講じている。

宮城県および東松島市は、津波の到達を遅らせるための3層の防潮堤を建設中であり、最も沿岸部に近い側から、高さ7.2mの1次防潮堤、6.2～4.5mの2次防潮堤、4.5mの3次防潮堤が造られている。かさ上げされた基地の駐機場はこれらの防潮堤と接続され、内陸側地区を守る防護壁の一部となって、名実ともに「最後の砦」となっている。

松島基地は「災害に強い基地」として、また「防災拠点」として地域の防災・防衛の要である。

一方で残念なことに、保有するF-2B機が18機から13機に減少したことに伴い隊員数も削減されてしまったため、わずか1,000名の隊員で緊急時の地域支援も行うこととなってしまった。このため近傍の陸上自衛隊と調整し、広大な敷地を利用して物資の集積所や陸自隊員の集結地等、防災拠点として活用していくとともに、来年度の陸上自衛隊東北方面隊震災対処訓練「みちのくALERT2018」に



4.5mかさ上げされた格納庫



高所化した配電設備

も初めて参加し陸・空の連携を強化していく。

更に、基地司令の「チーム松島」という方針の元、部隊内だけでなく部外および関係省庁、地域機関、近隣住民とも一体となって各種事態に対応していこうとする姿があった。

### 3. 松島基地所属部隊見学

#### (1) ブルーインパルス

第11飛行隊の格納庫において、ブルーインパルス仕様のT-2機およびT-4機を見学した。現在の松島基地副司令で、元ブルーインパルス2番機パイロットの阿蘇1佐から、飛行中の

僚機との間隔や目線の位置など、普段は知ることのない内容のご説明を頂いた。

ブルーインパルス史料館では、初代F-86F戦闘機時代からの貴重な資料や、大震災復興に向けて一丸となるため機体に貼られていたメッセージプレートなどが展示されていた。

なお見学日の午前中には、12月3日に宮崎県の新田原基地祭で今年の展示飛行スケジュールを無事終了したばかりのブルーインパルスが、練度維持のための飛行訓練を実施しており、期せずしてフル科目の演技を観ることができた。



副司令 阿蘇1佐



実機に貼られていたプレート



飛行前のT-4ブルーインパルス機



2、3、4番機が背面

## (2) 第21飛行隊

T-4練習機による基本操縦課程および戦闘機操縦基礎課程を修了したパイロットは、F-15とF-2の機種別の訓練コースに分かれ、F-15は宮崎県の新田原基地で、F-2は松島基地でそれぞれ実際の戦闘機による訓練を受けることになる。見学当日も2名の若いパイロットの方々が、教官に対しきびきびとした口調で飛行訓練後のデブリーフィングを行っていた。

飛行服や救命装具、ハーネス、耐Gスーツ等を試着させて頂いたが、装具を身に着けると体を動かすのも困難な状態となり、戦闘機パイロットはその状態で戦闘機を操り、高いGの中で精密機器を操作しつつ戦闘を行うということで、改めて肉体的にも厳しい仕事であることを認識した。

## (3) 松島管制隊

松島管制隊は、松島基地所属の航空機等に対する管制業務だけではなく、東北地域を通過する民間航空機に対する航空交通管制業務も、国土交通省の業務を一部分担する形で実施している。そのため、所属隊員は1年365日24時間休むことなく、交代制で管制塔に上り勤務をしている。

## (4) 松島救難隊

航空総隊隷下に所属し、航空機搭乗員の救助、海や山での遭難者の救出、急病人の輸送などに自らの生命をかけて活動する部隊である。主に三沢基地および松島基地から航空機が訓練を行う際には松島救難隊が1次待機となり、通報から5分以内に捜索・救助に出勤できるような体制を取る。

救難隊のモットーは、That others may live (他を生かすために) である。

航空自衛隊救難員の任務は、有事の際の交戦空域における戦闘救難（コンバット・レスキュー）であることから、陸上自衛隊の空挺レンジャーに匹敵する訓練を受ける他、水中での活動のためのスクーバダイビングの訓練も実施している。

捜索・救難は常に2機種の航空機で実施し、ビジネスジェット型のU-125A機で短時間に現場付近に進出し捜索を開始することにより、UH-60Jヘリコプターが至短時間・至短距離で目的地に到着できるようにすることである。



整備中のU-125A救難捜索機



UH-60J救難ヘリコプター

#### 4. 所感

今回、まだ東日本大震災の爪痕が残る松島基地を研修させて頂くことができ、航空自衛隊の装備を見学するだけでなく、震災時の状況および復旧・復興に関する体験談や教訓を伺うことができたのは、大変貴重な経験であった。

今後想定される南海トラフ巨大地震に関して、日本で唯一大規模な被害を経験した松島基地の、防災に対する地域ぐるみの取り組み

は非常に大切な教訓であり、できるだけ早く東南海地域に展開・導入すべきであると感じた。

最後に、年末のお忙しい中、工業会からの見学申し込みを快く受けて頂き、手厚い対応をして頂いた航空教育集団司令部をはじめ、松島基地司令 時藤和夫空将補（見学当時、現在は北部航空方面隊副司令官）以下、所属隊員の皆様に心より厚く御礼申し上げます。



〔(一社) 日本航空宇宙工業会 技術部部長 原野 清隆〕